

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第30回
 第6章 鳥越信先生
 その2 児童文学研究のデザイン（下）

1979（昭和54）年11月、鳥越信先生（1929～2013年）が監修した児童文学史展のお手伝いで、鳥越先生といっしょに沖縄に行った。私は、1年浪人して入学した大学院の1年次で、24歳だった。

『校定新美南吉全集』

前回、1970年代から90年代にかけて、鳥越信先生を中心に児童文学研究の基礎資料の整備がいろいろなかたちで進んだことを書いた。そうした仕事の一つが『校定新美南吉全集』全12巻・別巻2（大日本図書1980～83年）である。

南吉の年譜をはじめ様々な資料を収録した別巻以外の12冊が刊行されたところで、『季刊児童文学批評』創刊号（1981年9月）（注1）に、細谷建治さんと私がそれぞれ3段組み見開き2ページの書評を書いた。細谷建治のタイトルは「二つの作品・二つのイメージ」。この全集は、南吉の原稿を精査して、推敲の過程を明らかにしている。細谷さんは、「手袋を買ひに」を例にあげた。母さん狐は、手がつめたい子どもの狐のために、母子で手袋を買いに行く。夜のことだ。

「母ちゃん、お星さまは、あんな低いところにも落ちてるのねえ。」とききました。

「あれはお星さまぢやないのよ。」と言つて、その時母さん狐の足はすくんでしまひました。（引用は同全集による。以下も同じ）

細谷が目にするのは、母さん狐のこのあとのことば、「あれは町の灯なんだよ。」だ。町の灯を見て、以前、町で「とんだめ」にあった母さん狐は、動けなくなってしまふ。結局、子どもの狐だけを帽子屋へ手袋を買いに行かせることになるのだ。『校定全集』の【推敲】を確認すると、母さん狐のことばは、最初、「あれは村の灯なんだよ。」だったのが書き換えられたことがわかる。細谷は、こう述べる。

ぼくは、使われなかった《村の帽子屋》と決定稿の《町の帽子屋》という二つのイメージの間をつなぐ南吉の作品行為をこれから考えていきたい。

ともかくも、今度の全集は、作品の「校異」をあきらかにし、南吉の「行為」をもかいまみせてくれた。あとはもう、ぼくらの想像力をただ働かせるだけだ。

つづけて、「苦言をひとつ。」として、「手袋を買ひに」の【語注】の「帽子屋」を問題にする。「当時、半田に「山半」などという帽子屋があり、店の庇の上に、帽子の絵や店名をかいた横長の看板を掲げていた。」と記されているのである。細谷は、書評をこうしめくくる。――「帽子屋が〈村〉にあったのか、〈町〉にあったのかは大きな問題になるところだ。そして、それは決して〈半田〉の一帽子屋にイメージを限定してすむような「私」的なものではないのである。ひとつの社会意識＝時代意識としての〈町〉あるいは〈村〉のイメージをこそ、ぼくらは追うのである。」

さて、もう一つの私の書評だが、タイトルは「豊かに読みたい」。少し長くなるが、これは、ほぼ全文を再録する。

豊かに読みたい（宮川健郎）

『校定新美南吉全集』全一二巻が完結した。これには、未発表作品や日記、書簡、メモ類をふくむ、新美南吉の全著作がおさめられている。原稿用紙の使用状況をふまえて、作品の制作日が推定されている。原稿の推敲の過程がわかる。原稿、初出雑誌、初出単行本、牧書店版全集を照合した、その異同も示されている。さらに、各作品の解題、語注がある。これまで〈子狐〉で流布していた「ごん狐」の語句が、初出では〈小狐〉であったことなど、作品の読みにかかわるいろいろな発見が、随所にもりこまれている。

昨年六月に刊行が開始されたこの全集は、大きな拍手でむかえられたといってよい。

〈すでに『校本宮沢賢治全集』を私たちは持っているが、純粹に児童文学分野から提出されたもので、全集の名に値する全集は、これが最初である。〉（佐藤通雅「『校定・新美南吉全集』刊行に寄せて」、『図書新聞』'80・8・16）

〈南吉の作品を論じたり、教材として扱ったりするには、今後、この全集ぬきでは済まされないだろう。〉（冨田博之「時評 児童文化」、『教育』'80・12）

高い評価がある一方、南吉がこれほど大きな全集をもつような作家だろうか、という意見もあるようだ。それを、もっともはっきり打ち出したのが、紅野敏郎氏の「新美南吉の小説」というエッセイである。当の南吉全集の第五巻月報（'80・10）に掲載されている。

〈過去にさかのぼれば、小川未明や坪田譲治のような作家がいるが、文学史の脈絡でいえば、この新美南吉の存在に、決して大きな位置を与えることは出来ない。（中略）新美南吉のような児童文学者は、三巻本の全集の梶井基次郎、あるいは牧野信一、こういうかたちの全集にしたてあげるべきであって、十数巻もの重さをもった児童文学者——そのなかに「童話・小説」の巻も多く見うけられる——というふうには私には思えない。〉

紅野氏は、文学史を秩序立てていくという方向で、発言している。だが、文学史が秩序立てるべきものとして意識されたとき、それは、ひとつの「制度」と化するのではないか。

そのことは、同じエッセイのつぎの部分からもうかがうことができる。

〈筑摩書房の「明治文学全集」九十九巻のなかには、巖谷小波は、川上眉山とともに一冊、他に「少年文学集」が一冊、こういう比重でいくと、かりに「大正文学全集」「昭和文学全集」が編まれるとすると、（中略）新美南吉は、「少年文学集」のなかの小さな一人、というぐらゐの位置しか与えられないであろう。〉

児童文学は、「制度」のなかでは、いつも小さな位置しかあたえられてこなかった。(中略)「制度」のわくをこえた、この全集の編者たちに敬意を表したい。

全集一二巻をささえているのは、「真の南吉」の像を明らかにしたいという情熱だろう。「うた時計」や「ごんごろ鐘」など戦時下に書かれた作品が、戦後、刊行される際に、作者の文学上の先輩、巽聖歌の改変をうけていることは、よく知られている。改変された部分を原形にかえし、南吉のもともとの意図を生かすかたちでテキストを決定するのが、この全集の第一の目的だった。この仕事は、「真の南吉」というものを想定することによって成り立ったはずだが、それが、三〇歳(正確には、あと4か月あまりで30歳の29歳—宮川後注)で死んだひとりの文学青年の個性を肥大させる結果もまねいた。ここに、南吉はそんなに大きな作家か、という疑問の出てくる余地ができたともいえる。

『校定新美南吉全集』は、巽聖歌の改変をうけたテキストなど、さまざまな異本をつきぬけ、南吉の本来の意図を実現しようとした。が、それは、子ども読者が実際に南吉の作品を読んでいる、その現場から、ぼくたちを遠ざけた。子どもたちは、教科書や、新字新かなの流布本で南吉を読んできたし、いまでも読んでいる。これらの異本がどのような経緯で生れ、子ども読者がそれとどのようにつきあっているかを見ていくこともしなければならない。外山滋比古氏のいう「異本論」(『異本論』みすず書房'78・11など参照)が必要である。南吉文学の「与え手」としての巽聖歌についても、新たな検討がなされなければならないだろう。

気になることが、もうひとつある。

〈兵十 当時、岩滑新田(現・半田市平和町一丁目七四番地)に、江端兵重が住む。「田鍬きの名人」と呼ばれた和牛使いの名手。魚とり、はりきり網漁(後出)、狩猟にも長じ、大雨の時は必ずはりきり網漁をしたと伝^(ママ)えられる。一九四〇年(昭和一五年)没。〉(第三巻・「ごん狐」語注、カッコ内原文)

作中の人名が、右のようなかっこうで解説されている。このことは、すでに、『毎日新聞』夕刊のコラム「変化球」('80・9・6)が〈私小説的発想〉と評しているが、南吉研究に、南吉の伝記的事実との関連のみで作品を論じる傾向をもたらすとすれば、危険だ。作品は、あくまで自由に読まれ、論じられなければならない。『校定新美南吉全集』を、豊かに読んでいきたい。

「児童の立場」

私の児童文学史観が長く鳥越信先生の強い影響下にあった(ある)ことは、この章のその1「三つの児童文学史展」で述べた。しかし、鳥越先生が中心になって編纂された『校定新美南吉全集』については、編集委員会と私の考えかたのちがいは割合はっきりしているのではないか。再録した書評のことばを使えば、編集委員会は、「真の南吉」(つまり、作者)を明らかにしたいという情熱によって仕事をし、私のほうは、「子ども読者」という問題を持ち込んで考えようとしている。

私は、『季刊児童文学批評』のつぎの第2号(1981年12月)に、恩田逸夫『宮沢賢治論』全3巻(原子朗・小沢俊郎編、東京書籍1981年)の3ページの書評を書き(「遠くまで行くための覚書」)、『校定全集』の書評に重なることを述べている。

『宮沢賢治論』全3巻は、終生、賢治研究にかかわりながら、賢治に関する論文集を残さなかった恩田逸夫が1979(昭和54)年に亡くなったあとに編まれたものだ。

私は、第3巻『童話研究・他』に収録された一番の大作「賢治童話「どんぐりと山猫」試論」のことを書いている。初出は、『明治薬科大学紀要』第7号(1977年9月)だから、恩田の最晩年の執筆だ。恩田は、この論考で「童話作品の解明に当たっては、児童の立場と成人の立場との両面からの考察がなければ十分とはいえない」として、その両面から作品を論じようとする。編者のひとり、小沢俊郎は、第1巻巻末の「回想 恩田逸夫と宮沢賢治」で、恩田を「近代文学研究の方法で賢治を扱った先駆者」としたが、最晩年の恩田は、「近代文学研究の方法」とはちがう何かを切りひらこうとしたのかもしれない。しかし、私は、「児童の立場」からの考察は、うまく機能しているとは思えない。」として、恩田の論文の最後にあることばも紹介している。——「なにしろ書き手の賢治が成人であり、読み手の私も成人であると、どうしても、この面での読み方に重みがかかってしまったと思う。」

「児童の立場」からの考察というのを、子ども読者論と呼んでもよい。(中略)児童文学批評の質的な転換のために、もっとも、もとめられているのが、子ども読者の読みのあり方に関する考察である。子ども読者論の登場が待たれて久しい。ところが、この領域は、依然、一步もすすんでいないのである。」——私は、こうも書いた。そして、書評のしめくくりで、『季刊児童文学批評』第3号に「子ども読者論の観点からの賢治童話論」を発表すると予告したのだ。

前田愛先生

『季刊児童文学批評』第3号(1982年3月)、第4号(1982年7月)に、「宮沢賢治童話論(上) しかけられたわな——「どんぐりと山猫——」、「同(下) 分裂する作品像——「注文の多い料理店——」を発表した。賢治童話の子ども読者論をめざしたものだ。これは、実は、1977(昭和52)年12月に立教大学文学部に提出した卒業論文「宮澤賢治童話論——児童文学の基本問題」を書き直したものだ。

以前にも書いたが、大学1年生が終わる春休みから、日本児童文学者協会が主催した「第2期批評・評論教室」を受講した。その「評論教室」の入学試験にあたる「なぜ児童文学批評をめざすか」というテーマの作文のはじめに、自分も子どもの本を読んできたけれども、子ども読者の立場で考えるようなこと、「読者論」が必要ではないかと思った。私は、最初から、「子ども読者」の問題を織り込もうとしていた。それは、「評論教室」より前、大学1年生の夏休みに、前田愛先生(1931~87年)の著書『近代読者の成立』(有精堂1973年)を読んだことが大きい。大学に入学して、在籍した日本文学科の先生たちの本を読んでみようと思って読んだ1冊だった。入学の前の年に刊行された新しい本だった。国文学の研究書を読むのははじめてで、時間がかかったが、1か月くらいで読み終わった。読書のスタイルの変化から近代文学の成立について考え直した論考「音読から黙読へ——近代読者の成立——」などを強烈な印象で読んだ。そして、それなら、子ども読者論も可能なのではないかと思った。

前田先生は、当時はまだ40代前半の助教授だった。2年生になって、はじめて前田先生の授業を受講した。「日本文学講読」という近世後期の黄表紙や洒落本を読むクラスだった。前田先生は、近世文学から研究をはじめた人だ。授業後の教室で質問をしたことがきっかけで、先生と話をするようになった。3年生、4年生で

は、先生の「日本文学演習」を履修し、読者論をやりたいとあって、卒業論文の指導もお願いしたのだ。

私の賢治童話論は、7人ほどの小中学生に賢治童話二つを読んでもらった上で、それぞれに感想をインタビューすることからはじめている。インタビューから、子ども読者の読みに関する仮説を導き出し、その仮説を確かめるために、小中学校の教室で、同じ二つの童話を読み聞かせしてもらったあと、簡単なアンケートに答えてもらった。のべ300人ほどの回答を得た。

インタビュー→仮説→大量アンケートという、この方式は、前田先生が示唆してくださったものだ。先生は、桑原武夫『宮本武蔵』と日本人』（講談社現代新書1964年）という読者研究がこの方式ですすめられていることを教えてくださって、本も貸してくださった。先の『近代読者の成立』の巻末に書き下ろされた「読者論小史」には「内容分析の方法による読者研究としては戦後のもっともすぐれた労作のひとつ」という評価のある仕事だ。

私が学部学生だった1970年代に、日本で「読者」という問題に取り組んでいたのは、おもに前田先生と、『校定全集』の書評でも名前をあげた外山滋比古のふたりだった。外山の本は、まず、『読者の世界』（角川選書1969年）を熟読し、『修辭的残像』（みすず書房1968年）、『近代読者論』（同前1969年）、『異本論』（同前1978年）なども読んだ。前田先生が歴史的な文脈で「読者」をとらえようとするのに対し、外山は、「読者」とはどういうものを様々な例で具体的に考えていく。

海外の「読者」に関する理論的な著作、H・R・ヤウス『挑発としての文学史』（饒田収訳、岩波書店1976年）や、W・イーザー『行為としての読書——美的作用の理論——』（饒田収訳、岩波書店1982年）も翻訳、刊行されて、話題になった。

語注をめぐる

さて、『校定新美南吉全集』に話を戻す。

『季刊児童文学批評』第2号（1981年12月）に、鳥越信先生から『校定新美南吉全集』の「語注」について「作った側の意見」という原稿の寄稿があった。（注2）

もともところどころの全集を編集するにあたって、私たちが最初に議論を積み重ねてきたプリンシプルのうち、全体を貫く最大の柱として確認したことは、真実の南吉を提供すること、その一点であった。

「真実の南吉を提供すること」ということばは、私の書評の指摘とも重なる。細谷建治や私が批判的にあつかった語注については、「真実の南吉」の提供ということのつづきで、こう述べられている。

作家が作品を書く場合、意識的にせよ、無意識的にせよ、それまで作家が生きてきた直接・間接の経験が、人物や場面や事件の発想につながっていることは否定できない。一人の登場人物の命名にさえ、それは無関係ではない。（中略）何かのきっかけなしに命名されることは絶対にありえない。

鳥越先生は、その後、『季刊児童文学批評』第4号の合評会（1982年9月4日、

於・子どもの文化研究所)にも、ゲストとして来てくださった。創刊号の『校定新美南吉全集』の書評、第2号の『宮沢賢治論』の書評で「子ども読者」という問題を持ち込み、第3号、第4号で子ども読者論の実践を試みたが、これは、鳥越先生に一蹴された。

第4号合評会の報告、藤田のぼる「児童文学・子ども・読者・想像力、そして批評と研究」(『季刊児童文学批評』第5号、1982年11月)には、当日の鳥越先生の「子どもの本質は手にとるようにわかる」という発言が紹介されている。藤田さんは、「生身の子ども(一人ひとり)を相手にするというのではなく、子どもの“本質”を知ることであり、……」(カッコ内原文)と解説している。藤田さんは、つぎのようにも書く。

鳥越氏の「生身の子どもではなく、子どもの本質を」という論法でいけば、当然宮川の試みた読者論の方法は明快に否定される。これについては結果として僕も全く同意見である。参加者全体の中でも、あの方法の有効性に対する支持はほとんどなかった。

「宮沢賢治童話論」(上)(下)は、その後、おしまいにもう少し書き足して、私の最初の論文集『国語教育と現代児童文学のあいだ』(日本書籍1993年)に「賢治童話と読者—子ども読者論の試み—」として収録した。それによって、前より広い範囲で読まれるようになったのだが、国語科教育の研究者たちからは好意的にむかえられた。(注3)私は、児童文学の批評研究と、国語科教育研究のへだたりについても考えるようになる。

1981年3月12日

『日本児童文学史年表』1・2や『校定新美南吉全集』ほか、児童文学研究の基礎資料の整備をすすめた鳥越先生は、その発展として、『年表』作成などのために収集した資料約12万点を寄贈して、資料館を創設するという構想を発表した。引きつづき資料を収集すること、資料を整理して公開することを条件に全国に公募したのだが、大阪府が資料を受け入れて、児童文学館をつくることになった。大阪府で、日本初の児童書専門資料館設立プロジェクトが発足したのは、1979(昭和54)年5月である(この年の11月、鳥越先生の資料を使って、沖縄で「児童文学のあゆみ展」を開催したときには、大阪府への寄贈はもう決まっていた)。そのあと2年ほどして、いよいよ実際に大阪へ資料を運び出すことになって、それが「書庫番」である私の仕事になった。『校定新美南吉全集』の書評を書くより半年くらい前のことだ。

手もとの古い手帳の中から1981(昭和56)年の分を引っぱり出して開くと、3月3日、4日、11日、12日に鳥越先生のお宅へうかがった記録が残っている。3日、4日には「大阪行荷物作る」、11日、12日には「大阪行荷物運び出し」というメモがある。資料をすっかり送り出したのは、1981年3月12日・木曜日の夕方だったことになる。何もなくなった書庫を、先生のお連れ合いとふたりで大そうじしたことをおぼえている。

この4日前の日曜日の未明に、私の父が死んだ。私が小学校を終わるころから十数年も病んだ父が、それでも不意にという感じで亡くなった。日曜日が通夜、月曜

日が告別式だった、その週の水曜日、木曜日に鳥越資料を送り出したのだ。1981年の3月第2週は、25歳の私にとって、大きな区切りだった。父の告別式の日はずら雨、大阪へ荷物を出した2日間は早春のよく晴れた日だった。(つづく)

(注)

- 1、『季刊児童文学批評』は、「児童文学批評の会」の編集発行。同会のメンバーは、伊藤英治、井上啓、大岡秀明、佐藤宗子、砂田弘、長谷川潮、藤田のぼる、細谷建治、宮川健郎、古田足日(代表)。第一次『季刊児童文学批評』は1983年、第6号で終刊、メンバーに少し変更があった第二次は87~89年、第5号で終刊。
- 2、その後、『季刊児童文学批評』には、『校定新美南吉全集』およびその語注に関する以下の文章が掲載された。佐藤宗子「作品論のために 〈読む〉ことの試論」(第3号、1982年3月)、佐藤通雅「『校定新美南吉全集』の周辺」(同前)、細谷建治「想像する力はとりとめなくはばたくものだ——『校定新美南吉全集』の「語注」についての意見——」(第4号、1982年7月)、鳥越信「とり急ぎ佐藤通雅氏に」(同前)

そのほか、保坂重政「徹底的——校定新美南吉全集・『別巻』刊行を前に」〈bookmen〉(『図書新聞』1982年2月13日)、上田信道「児童文学個人全集について考える」(『本とこども』1982年6月)、府川源一郎「『ごんぎつね』をめぐる謎 子ども・文学・教科書」(教育出版2000年)にも、このことに関する言及がある。

- 3、山元隆春「読者論の具体的展開」(田近洵一他編『「読者論」に立つ読みの指導』小学校高学年編、東洋館出版社1995年所収)は、「児童文学研究者の宮川健郎はかつて宮沢賢治の「注文の多い料理店」について、小・中学生を中心とした大規模なアンケート調査を試み、その分析結果を踏まえて次のように述べた。」と書き出される論文である。山元さんは、私の考察をより普遍的な議論の場へと引きあげてくれた。守田庸一「宮沢賢治「注文の多い料理店」の授業実践史」(浜本純逸監修、藤原顕編『文学の授業づくりハンドブック・授業実践史をふまえて・』小学校・高学年編／単元学習編、溪水社2010年所収)が山元、宮川を紹介するなど、国語科教育の研究者が紹介、引用する例は多い。

(付記) 宮川健郎「宮沢賢治童話論——「子ども読者」への出会い」〈連載・私の卒業論文⑤〉(『立教大学日文ニュース』第18号、2013年12月)、宮川健郎「1981年3月12日」(『大阪国際児童文学館を育てる会会報』N0.113)と内容が重複する部分があることをおことわりします。